

教育臨床プロジェクト報告

教育臨床活動のまとめ (平成15年2月～平成16年1月)

加藤 義 男^{*}
(2004年2月5日受理)

I. スタッフ

教育臨床プロジェクトの平成15年度研究員は、加藤義男（附属教育実践総合センター）、鎌田文聰（障害児教育講座）、宮崎眞（障害児教育講座）の3名である。外部からの研究協力者として臨床心理士、教員、大学院生等16名を委嘱した。

また、地域貢献特別事業にかかる非常勤職員（心理相談員）として、菅原由美子（臨床心理士）、佐藤歩（私立高校カウンセラー）の2名の先生を委嘱した。

II. 相談・支援活動

ここでは、附属教育実践総合センター「心理・教育相談室」における相談・支援活動について報告する。個別相談、コンサルテーションは加藤が中心となって、2名の心理相談員の協力も得て実施したものであり、その他のグループ支援活動や相談会等は加藤が責任者となって、研究協力者、心理相談員の協力を得て実施したものである。

(1) 個別相談

平成15年2月から平成16年1

表1. 個別相談の実施状況

月までの個別相談の来談者は108人であり、その内訳は次のとおりである。①平成13年、14年からの継続が37人、平成15年度新規が71人であった。②年齢は4歳から41歳。内訳は、幼児22人、小学生59人、中学生17人、高校生7人、18歳以上3人であった。③相談内容（問題の内訳）は、「不登校」10人（9%）、「ADHD及びその疑い」30人（28%）、「高機能自閉症・アスペルガー症候群及びその疑い」29人（27%）、「学習障害（LD）及びその疑い」9人（8%）、「発達の遅れ」

月	月ごとの相談者実数	相談延べ実施回数
2月	19人（7人）	23回
3月	16人（5人）	19回
4月	26人（12人）	28回
5月	12人（7人）	13回
6月	1人（1人）	1回
7月	10人（4人）	10回
8月	14人（6人）	16回
9月	15人（6人）	17回
10月	17人（6人）	21回
11月	15人（7人）	18回
12月	11人（3人）	15回
1月	18人（7人）	20回
計	174人（71人）	201回

※（ ）はその内の新規相談者の数
※相談の中に、電話相談8人を含む。

13人（12%）、「その他」17人（16%）であった。「その他」とは、かん黙2人、かん黙と不登校1人、

*岩手大学教育学部

アスペルガー症候群と不登校1人、反抗挑戦性障害の疑い4人、高機能自閉症と不登校2人、ひきこもり1人、いじめ1人、うつ状態2人、聴覚障害1人、構音障害1人、親子関係1人であった。

月ごとの相談者実数及び相談延べ実施回数を表1. に示した。来談者108人に対して、延べ201回の相談を実施した。一回の相談時間は1時間～1時間半程度であり、行動観察、心理テストの実施、プレイセラピー、母親面接、カウンセリング等を行った。

(2) コンサルテーション

20校園（幼稚園・保育園5園、小学校12校、中学校2校、養護学校1校。盛岡市内11校園、市外9校園）へ計25回出向いて、事例検討中心のコンサルテーションを実施した。

さらに、相談室において、小学校、中学校、幼稚園、養護学校の教員やスクールカウンセラーとの事例中心のコンサルテーションを7回実施した。

(3) 不登校児への支援活動（「みんなでチャレンジ」の取り組み）

不登校児支援の会「みんなでチャレンジ」において、不登校児への支援活動を実施した。対象児は6人（中学3年3人、中学2年1人、小学6年1人、小学5年1人。男3人、女3人）。支援スタッフは9人（いずれも教育学部大学院生2人、教育学部生5人、心理相談員1人、及び加藤）である。活動状況は次のとおりである。

①グループ活動・・・9回（月1回、土曜日）実施した。内容は、スキー、スケート、子ども科学館、運動、動物公園等である。平行して、親との面接も行った。9回の参加児総数は25人であった。

②個別支援・・・平日の10時～12時、相談室において心理相談員との一対一の支援を実施した。支援の内容は、学習面・心理面のサポートであり、中学2年生の1人が週1回程度来所した。

(4) 「LD相談会」の取り組み

「LD相談会」（土曜日、午後実施）を3回実施した。スタッフは臨床心理士、作業療法士、養護学校教員の7人（附属教育実践総合センター研究協力者）及び加藤である。

来談児童は4人。その内訳は、幼稚園1人、小学生2人、高校生1人で、いずれも男子。問題別にみると、LD（書字・読字障害）の疑い1人、ADHDの疑い1人、高機能広汎性発達障害の疑い1人、軽度精神発達遅滞1人。

(5) ADHD またはその疑いを持つ児童の親への支援活動（「わっこの会」の取り組み）

「わっこの会」（「いわてADHDを考える会」の通称、加藤は世話人及び事務局を担当）として次の活動を行った。

①親の集い・・・6回実施した。参加者延べ総数は52人で、親同士の意見交換やグループカウンセリングを行った。

②親と子の集い・・・お花見会（4月実施。参加17家族）、クリスマス会（12月実施。参加11家族）を実施した。両者とも、教育学部学生の協力を得た。

④相談会・・・6月に、田中康雄先生（東京、精神科医師）を招いての相談会を実施した。参加者は16人。

(6) 高機能広汎性発達障害児の支援活動（「エブリの会」の取り組み）

「エブリの会」(「いわて高機能広汎性発達障害児・者を考える会」の通称、加藤は世話人代表)として次の活動を行った。

①エブリ教室・・・毎月一回、土曜日午前中に9回実施した。参加児童は8人(すべて小学生。男子6人、女子1人)。スタッフは15人(教育学部大学院生、養護学校教員及び学部学生。院生と教員は研究協力者)。

②学習会・・・9月に実施。講演「高機能広汎性発達障害の思春期の問題について」(講師は南花巻病院臨床心理科の木村真先生)、及び子育て体験の話題提供(先輩の母親から)を行い、38人が参加した。

③エブリクラブ・・・エブリ教室修了生の集まりとして2回実施した。

(7) 附属養護学校「心と発達の相談室」への協力

附属養護学校において、悩みをもつ保護者との相談の場「心と発達の相談室」が2回(6月、11月)開催され、教育学部教員3人(鎌田文聰、名古屋恒彦、加藤)が相談員として参加、協力した。来談者合計は7人。

(8) 家庭への学生の派遣(「(仮称)ラポート事業」)

子どもの抱えるニーズ、及び親からの要請に応じて学生が定期的に(月1回～週1回)家庭訪問し、子どもとの関わりや親との話し合い等を行う事業(「ラポート事業」と仮称)に取り組んだ。今年度は、4人の子どもに対して4人の学生(大学院生1人、学部生3人)が関与した。子どもの内訳は、小学生3人、中学生1人。男子3人、女子1人。不登校3人、ADHD1人。

関わりをとおして、子ども自身の成長・改善につながっており、学生にとっても子ども理解や支援方法の向上につながっている。

III. 文部科学省「地域貢献特別事業」(学校不適応児への教育的支援事業)の取り組み

平成15年度地域貢献特別事業「初等中等教育支援事業」のなかの「学校不適応児への教育的支援事業」について教育臨床プロジェクトが中心となって取り組んだ。取り組みの主な内容は、次のとおりである。

(1) 心理相談スタッフとして、2名の非常勤職員(心理相談員)を平成15年9月から平成16年3月まで依頼し、加藤も含め3人で以下の事業に取り組んだ。

(2) 事業

①個別相談・・・「心理・教育相談室」における相談活動(前述)

②教育委員会との共同事業による研修事業・・・ADHD等特別支援教育研修、及び教育相談事業を次の4市町村において実施した。宮古市(小中学校に出向いての相談・研修事業。心理相談員、加藤で担当)、滝沢村(小学校に出向いての相談・研修事業。鎌田文聰、宮崎真、心理相談員、加藤で担当)、釜石市(岩手大学釜石教室サテライトによる講義の実施。県教育委員会指導主事、加藤が担当)、久慈市(講義の実施。県教育委員会指導主事、加藤が担当)。

IV. 研修活動

講演会の開催

演題「ADHD及び高機能自閉症・アスペルガー症候群の理解と支援の方法」

講師 千谷史子先生（司馬クリニック、臨床心理士）

日時 2003年11月24日

参加者 139名

IV. 外部公的機関との連携・協力

平成15年度において、いくつかの関係委員会等の委員として参加し、地域との連携・協力を図った。主なものは、市町村就学指導委員会、県家庭支援事業等相談事業専門家会議、盛岡市特別支援教育支援チーム委員会、県 ADHD 児等支援事業調査研究運営会議等である。